

『明日、『何者』かになるために』

1

こうやって、モノを書こうと思ったのはいつぶりだろうか。
何度か書こうと思ったが、就活やら新社会人生活やらの多忙さから書けなかった。
「さて、どこから書こうか」
パソコンを立ち上げた俺はゆっくりと文字を打ち込んでいく。
慣れたタイピングの音が部屋を反響し、リズムを刻む。
「始まりは……」
こうして、俺は誰に読まれることもない独りよがりの物語を紡ぎ始めた。
そうだな、冒頭の一文はこうしよう。

『小さな頃から将来の夢がなかった』

2

小さな頃から将来の夢がなかった。
幼稚園や小学校、親戚の集まりなんかでよく将来の夢を聞かれることがあった。
周りの皆はそれに対して「プロ野球選手になる」や「ケーキ屋さんになる」など、目を輝かせて口にしていた。
しかし、俺にはそれができなかった。
どうしても、自分の将来を考えることができなかった。
ませていた、とは少し違う。
俺は、本当にやりたいことがなかった。
だから、将来のことを聞かれた時はいつも周りに合わせて適当に回答していた。
俺は、そんな自分が心底嫌いだった。
自分のやりたいことも、したいことも、なってみたいものも決められない。
そんな自分が情けなくて、嫌いだった。

そんな俺、藤島和樹は大学三年生の夏を迎えていた。
夏の厳しい日差しがカーテンの隙間から差し込む。
「こんなもんあったら苦労してねえよ」
俺はパソコンを睨みつけ、文句を零す。
画面にはインターンへ申し込むために必要なエントリーシートが映っていた。
そして、その中の一つの問いで俺の手は完全に停止した。

『幼少期の将来の夢は何ですか？』

「だあぁ！　こんなもんやっつけられるか！　休憩だ休憩！」

何も思いつかないことに腹を立てた俺は、一度頭をリセットするためにパソコンから離れ、風当たりの良い廊下に寝そべる。

辺りからうるさい蝉の声が聞こえてくる。

「はぁ、なんで地元に戻ってきてまで就活やらなきゃならねえんだよ」

脱力しきった体じゃ文句が抑えきれない。

俺は夏休みを使って田舎の実家に帰省していた。

最初は山に囲まれたここでゆっくり何もせずに過ごそうと考えていたが、大学三年生の夏がそれを許してはくれなかった。

大学からは夏休みから就活を始めた方がいいと言われ、ネットにはもう就活の戦争は始まっていると書かれている。

「日本の就活早すぎるだろ。まだ本番まで一年弱もあんだぞ」

とは言え、俺も始めないといけないことぐらいは分かっている。

だから、こんな田舎にまで来てエントリーシートを書いていた。

しかし、とんだ伏兵に出くわしてしまった。

「将来の夢、か」

ぼそりと呟いたその声は蝉の声にかき消される。

嘘の夢を書こうと何度も思った。

しかし、どれだけ案を練っても俺はそれを書くことができなかった。

なぜなら、夢がないことは俺にとって最大のコンプレックスだから。

「……」

どこに焦点を合わせることもなく、俺は外に広がる壮大な自然を眺める。

昔から夢を語る人が羨ましかった。

その夢が叶う叶わないは別として、何かに本気で取り組めるその姿勢が俺にとっての憧れだった。

一方、俺にはやりたいことがなかった。

周りは意気揚々と夢を語り、その中で俺は嘘の夢を自信なさげに語る。

まるで、俺一人だけが置いて行かれるような、そんな疎外感が俺を満たしていた。

そして、俺は次第に夢を語る人に嫉妬し、当たるようになった。

だだの八つ当たりだってことは俺が一番よく分かっている。だが、俺はそうして自分のプライドをどうにか守ろうとした。

そんな守るべきプライドではないものを執拗に守ろうとする。その俺の卑賤で醜い考え方がこの上なく嫌いだった。

「……やめだやめ！ んなもん考えたってしょうがねえよ」

俺はこれ以上負の思考に陥らないように声を荒げ現実世界に戻ってくる。

と、そんなところに。

「随分と荒れてんなあ和樹。女に振られたか？」

寝転がる俺を見下ろす男が廊下の奥からやってくる。

「はっ！ 俺は負ける勝負はしねえタチなんだよ」

「小心者だな」

「賢いと言え」

軽口を軽口で返した俺は起き上がり、隣に座った男からお茶を貰う。

彼は俺の幼馴染で親友の塚本寛太。

親が神主をやっていて、その跡取りとして現在勉強中だ。

「で、何にうなされてたんだ？」

「インターンのエントリーシートでちょっとな」

「人ん家でエントリーシート書いてたのかお前……」

「別にいいだろ。家だと親が色々ちょっかいかけてくんだよ」

俺は乾いた口にお茶を流し込む。

暑さと大量に汗をかいたせいも、いつもより美味しく感じる。

「ふーん……どんなこと書いてあるか見てもいいか？」

「別にいいぞ」

俺が許可を出すと、寛太はそのそと動き出しパソコンの画面を見る。

普通はちょっとでも嫌がるところかもしれないが、俺と寛太の仲だ。今さら隠し事したってしょうがない。

「へえ、結構しっかり書けてる……ん？ 将来の夢のところ白紙じゃないか」

いずれ言われると心構えはできていたと思ったが、いざそこを指摘されると俺は言葉に詰まった。

「まだ、ないのか？」

「絶賛募集中だ。これじゃ、エントリーシートどころか就職先も決めらんねえな」

俺は上手く笑うことのできない表情を寛太に向ける。

夢を探そうとはしてる。でも、結局俺が本気で取り組みたいと思うことはなかった。

「そういうお前はどうかんだよ？」

「俺か？ 俺はあるぞ」

「はあ！？ んな話聞いたことねえぞ！？」

思わず俺は振り返り、寛太に一步近づいた。

最近会っていなかったとはいえ、俺は今の言葉が衝撃でならなかった。

「どんな夢だよ？」

「まずは神社を継いで、増築でも何でもしてもっと多くの参拝者が来てくれるような神社にしてやろうと思ってる」

身振り手振りを大きく使い、寛太は自分の掲げる目標を高らかに宣言する。

寛太の瞳には迷いが無い。本当に実現してやると言う気概が瞳に宿っている。

その目を見た俺は、どこかに置いて行かれる感覚に陥った。

よく感じているものだ。だが、今回はこれまでとは違う。

一番近い人が自分から離れていく。追いかけても手が届きそうにないと感じてしまう。

「そっか……」

唇が震える。手が震える。

どうにか笑おうと思っても、上手く表情が作れない。

そして俺は、

「まあ、こんな田舎の神社に人が来るか分からねえし？ 赤字にならないこったな」

親友の夢ですら、応援もせずに皮肉を付いてしまう。

いつもの発作だ。どうしようもない自分を守る防衛本能が働く。

「まだ先は長いし、別に否定はしないけどな、なかなか難しいと思うぜ」

違う。俺はこんなことを言いたいわけじゃない。

しかし、頭とは裏腹に自分の口から出る言葉は悪意に満ちている。

俺は寛太の顔を見ることができない。

怒っているだろうか。悲しんでいるだろうか。

どっちにしろ、俺にはもうどうすることもできない。

「大体だな」

「――おい」

寛太はたった一言で、俺の言葉を遮った。

俺は寛太に目を向ける勇気はなかった。

そして、俯いている寛太は俺に、

「お茶、おかわりいるか？」

優しい笑顔を向けたのだった。

「お前が荒んでることは大体予想がついてた。だからいったん落ち着け」

優しい声音に、優しい言葉。

俺は、その優しさに心が痛む。

どうせなら、こんな俺を否定してほしかった。寛太にそう言われたら、俺だって変われる気がしてたから。

「ごめん。ちょっと歩いてくる」

俺はその場にいることが苦しくなり、家を飛び出した。

呼吸が荒い。景色が色褪せていく。

自分が自分でなくなる。そんな感覚が頭から離れない。

「はあ、はあ」

何も考えず、がむしゃらに走った俺は、いつの間にか神社についていた。

この神社は寛太の父親が神主をやっている神社だ。

俺はふと、賽銭箱の前に立った。

虚ろな意識の中、俺は考えなくてもできる作法で参拝を済ます。

——神様、どうか俺に夢を下さい。

何と他力本願な願いだろうか。

でも、今の俺にはこれしかなかった。

それから、ゆっくりと脇道にそれて神社の裏手に回り、子供の頃から愛用しているベンチの前にやってきた。

「……クソ。なんであんなこと言ったんだよ、俺は」

ベンチに座ると同時、さっきの言葉を思い出し俺は俯いた。

決してあれが本心から出た言葉ではないと願いたい。

でも、もしかしたら……。

「考えるな……考えるな」

一刻も早く忘れようと、俺は目を瞑る。

それから、どれだけの時間そうしていただろうか。

しばらくして、唐突に目の前の茂みがガサガサと揺れだし、そこから。

「——猫？」

草木をかき分け、猫がゆっくりとやってくる。

その猫は茶色の猫だが、額だけひし形に白いという何とも特徴的な模様をしていた。

そんな猫は俺を気にすることなく、俺の横に座った。

「……？ お前、なんか見覚えあるな？」

俺はその猫に既視感を覚えた。

どこかで会ったことがあるか？ いや、全く記憶にない。

でも、どっかで見たことあるような……。

俺は横に座った猫に手を伸ばす。

そして、もう少しで触れると言った時に、

「人間様も大変じゃな」

声が聞こえた。だが、俺は耳を疑った。

「聞いておるのか？ わしはお前様に話しかけてるんじゃ」

どうやら横から話しかけられているようだ。

間違いはない。でも、いやそれは……流石にないだろお……。

しかし、現実はどうやら本当を語るらしい。

横にいる猫が、

「おお、やっと気づきよったか」

「ね……」

「ね？」

「——猫が喋ったあ！？」

「——にゃあああ！？」

3

「おいおいおい！ 寛太ッ！」

俺は猫を捕まえて急いで寛太の家に戻った。

「そんな慌ててどうしたって、なんだその猫？」

「この猫！ 喋んだよッ！」

「おお、お前様はこいつの友達じゃな？ 助けてくれ」

首根っこを掴まれている猫は、足をばたばたとさせている。

「あー、和樹はいったん落ち着け。で、猫を離してやれ」

「いや、でも」

「大丈夫だ、そいつは悪さはしねえよ。ただ喋るだけだ」

「その『喋るだけ』がヤバイんだろうが！？」

取り乱す俺を寛太は宥める。

少ししてから俺はわずかに落ち着きを取り戻し、猫をそっと手放した。

「まったく、猫の扱い方がなっとらんな」

そう言って前足を舐めて乱れた毛を手入れし始める猫。

「その猫どこで拾ってきた？」

「神社の裏側だ。寛太なら分かるだろ」

寛太は「あそこか」と顎に手を当てる。

というか、なんで寛太は喋る猫を前にしてそんなに冷静になっていられるんだ。

こっちは心臓が飛び出るかもしれないってぐらい驚いたってのに。

「寛太、お前こいつが何なのか分かんのか？」

「ああ、多分——神様？」

「……はあ？」

寛太の一言を俺は一瞬で理解することができなかった。

神様？ この足元でゴロゴロしてる奴が？

6

「んなわけ」

「忘れたのか？ あの神社に祀られているのは猫神様だ」

寛太は座り込んで猫を撫で始める。

確かに、あの神社に祀られている神様は猫だ。子供の頃何度も寛太のお父さんから聞かされた。

「神様が山から下りてきた、実に夢のある話だろ」

「そんなもんを信じるのかよ？」

「神主が神を信じなくてどうすんだよ」

寛太は軽く笑い流す。

「……にしてもこの猫の模様……あの時の小説の……まあ、それよりも」

撫でるのを止めた寛太は猫と向き合い、そして深々と頭を下げた。

「お初にお目にかかります、猫神様」

「別にそんなにかしこまらんでもええというのに」

「一応、これでも神主見習いですから」

俺はそのやり取りを横から呆然と眺める。

寛太は本気でこの猫を神様だと思っているようだ。

「猫神様はなぜこのような場所に？」

「別に大した理由はない。強いて言うなら暇だったからじゃな」

呆れて言葉も出ない。

こんな自分勝手な神がいていいものなのか。

「じゃが、実際は人間様が必死に参っておったんでな。特別に手助けするために出てきたわけじゃ」

「はっ！ 俺の願いなんて知らねえくせして何を偉そうに」

俺は不服とばかりに猫のことを睨みつける。

猫はその俺の敵意を感じたのか、若干毛が逆立ち威嚇しているように見えた。

「なら、お前様の願いを当ててやる」

「やってみろやってみろ」

俺はその挑戦的な発言にぶっきらぼうに答えた。

でも、ちょっと待てよ？ こいつはなんで俺が神社で参ったことを知ってるんだ？ 神社にいたからって俺が参ったとは限らないだろ。

わずかに鳥肌が立ち、俺は猫の言葉を遮ろうとしたが遅かった。

猫は言う。

「確か——『神様、どうか俺に夢を下さい』、じゃったか？」

俺はそれを聞いた瞬間、目を白黒させた。

あの神社には他に誰もいなかった。それこそ猫一匹も。

それどころか、俺はこんな恥ずかし願いを口に出した覚えはない。

汗が額から流れ、次第に頬から顎に伝わる。

「……本物、なのか？」

「もちろんじゃ。お前様の願いを見に来た」

猫特有の鋭い目に俺の顔が映る。

やがて、汗は床に零れ落ちた。

話を聞くために俺達はさっきまで寛太と二人で話していた風当たりの良い廊下に移った。

「和樹はお茶でいいとして、猫神様は……トマトジュースでも飲みますか？」

「なんでトマトジュースだよ。普通に水でいいだろ」

「じゃあ、トマトジュースで。100%じゃろうな？」

「もちろん」

したり顔をしながら寛太は飲み物を取ってくる。

ああ、もう突っ込むのも疲れた。

しばらくして、寛太は各々に飲み物を配る。

「では、改めて聞くとしよう」

猫はトマトジュースを器用に飲みながら話しかけてくる。

「つっても俺が神社で願った言葉の通りだよ。俺には夢がないから、夢が欲しいって願っただけだ」

俺はお茶を一気に喉に流し込む。

ちらりと猫のことを一瞥すると既にトマトジュースは飲み干されていた。

「して、どうして夢が必要なんじゃ？」

飲み終えた猫は俺の横にちょこんと座る。

「神様が就活のこと知ってるか知らねえけど、就活で将来について考えなくちゃならねえんだよ。でも、俺には夢がない。だから、俺にやりたいことを作ってほしい」

俺は飲み終えたグラスを強く握る。

なんで猫にこんな情けない願いを聞いてもらっているのか。

馬鹿馬鹿しいとも思う。でも、今の俺はなんにでも縋りたかった。

それこそ、変な猫にでさえ。

「人間様も大変じゃな。いちいち将来について考える必要があるとは」

「猫神様はそう言ったことは？」

「ない。わしら猫はいかに今日を生き延びるかだけだ。どうやって人間様に餌を恵んでもらえるかで必死じゃ」

「神様クソ情けねえ……」

自信満々に答える猫の姿にはまるで貫禄がない。

何度も言うが、本当に神なのだろうか。

「まあそんなことよりよ、パパッと俺に夢を与えてくれよ」

と、俺が催促すると猫は「無茶言うでない。そんな洗脳じみたことわしにはできん」とはっきりと言った。

「しかし、折角ここまで来たんじゃ。手助けには協力しよう」

「ほんとか？ どうやって」

「今からワシが言うことに対してやりたいかやりたくないかを考えろ。では行くぞ」

――。

「普通に会社員というのはどうだ？」

「それは夢なのか？」

――。

「では、自分で会社を立ち上げるんじゃな」

「経営難しそудし、赤字になったらどうするんだよ。自己破産とか勘弁だぜ」

――。

「今、人間様で流行ってる動画投稿者ならいいんじゃないか？」

「いやいやいや、あの人達毎日死ぬほど頑張ってる、それなのに成功者は一握り。続ける自身がねえ」

――。

「じゃあ小説はどうじゃ？ お前様はどうやら昔楽しそうに書いていたようじゃが？」

「あれは、ただ書きたかっただけだ。別に夢にするようなもんじゃねえよ」

――。

――。

どれだけの時間、言い合っただろうか。

既に太陽は山に隠れ、空が茜色に染まり始めた。

「お前様！ 本当にやる気があるんじゃろうな！」

「あるに決まってるだろ！ だからお前の言ったことに対して真剣に答えてんだろうが！」

「その答えが全部否定から入ったら意味がないじゃろ！」

「仕方ねえだろ！？ 失敗はしたくねえんだよ！」

太陽が隠れて気温が下がったが、俺達の言い合いは徐々に熱を増していく。

猫が言ったことに対し、俺は至って真面目に返答する。

しかし、その全てが押し問答にしかならなかった。

「じゃあお前様は何がしたいんじゃ！」

「それを一緒に考えてくれるんだろ!？」

そして、現在はこんな感じに至る。

途中、話が終わらないと踏んだのか、寛太は自室に戻ってしまった。

「こんな人間様がいたとはな！」

「そういうなら、変な提案しかできないやつが良くも神様なんて大それた肩書を背負ってるなんてな！ 信仰してるやつに謝りやがれ！」

俺達は唾を吐きながら、お互いに悪態をつきまくる。

もはやそこに、最初の願いを叶えるための言葉は一つもなかった。

「そこまでだ」

と、そこへ寛太が戻ってくるなり仲裁に入った。

「まともに考えられないならもう話し合うな」

「つってもこいつが」

「和樹」

寛太のその冷たい声音に俺は背筋が凍る。

「お前は他人に任せすぎだ。自分のことぐらい、自分で決めたらどうだ？」

静かに、淡々と言葉を紡ぐ寛太。

「和樹は昔からそうだ。全部人任せで済ませようとする」

「それは……」

「何を焦ってるんだ？」

寛太の乾いた声が俺の頭で反響するが、言い返すことはできない。

「……」

既に辺りは暗い。

りんりんと、鈴虫のひんやりとした鳴き声だけが聞こえる。

「お前様の優柔不断ぶりはよく分かった」

最初にこの静寂を切り裂いたのは猫の声だった。

そして猫は寛太と目を合わせる。

「お前様、確か、近いうちに祭りがあったよな？」

「はい、一週間後にあります」

「そこで、毎年なんか叫んでるじゃろ？ あれに参加しろ」

右前足を俺に差し向ける猫。

一週間後、この、町には一年で一番大きな祭りがやってくる。

そして、そこでは毎年メインイベントとして、祭りの参加者が一人ひとり壇上に上がっ

て各々好きなことを叫ぶ催しがある。

「これから一週間の間、お前様は必死に自分の夢を考え、そして祭りのあの壇上で叫ぶんじゃ」

「そんなこと言われても……」

「いいからやるんだ」

猫は語気を強めて言い放つと、徐に外に歩き出した。

そして去り際、

「どんな夢でもいい。だが、これができなければ今後未来はないと思え」

これまでの声音とは打って変わった神妙な声で忠告を残して、猫は姿を暗闇に消した。

「……未来はない」

最後の言葉を噛み締めるように俺は反復した。

なぜだろう。それまではまるで強制力の欠片もなかったくせに、その言葉だけは俺の心に深く突き刺さった。

「俺は手伝わないからな。お前の未来だ、自分で考えろ」

「説教された奴にそんなこと言えねえよ」

苦笑いを浮かべて、寛太を弱く見つめる。

分かってるよ。これは俺の問題だ。

「俺の未来か……」

空を見上げ、雲に隠れて見えない月を眺める。

この問題は俺にとっていずれは避けては通れない問題だ。

「俺は——」

いつまで経っても月が見えない暗い空を見上げた俺の口から、言葉が零れる。

——俺は、『誰』になるのだろうか。

4

あれから一週間が経過した。

既に夕方だというのに、町には多くに屋台が並び、この時を待ちわびたと言わんばかりに活気に溢れ、至る所から威勢のいい声が飛び交う。

そして、祭りの中心部には大きなステージが建設され、祭りのメインイベントが現在進行中だった。

「……」

俺はその舞台を睨みつけるように立っていた。

そう、祭りが幕を開けてしまったのだった。

「よう、調子はどうだ？」

「いいと思うか？」

寛太が綿あめや焼きそばを持ちながら俺に近づいてくる。どうやら祭りを満喫しているようだ。

「お前は気楽でいいよな」

一方で、俺は自分でもわかるぐらいにやつれていた。

一週間前。猫神から与えられた課題として、ここ一週間ずっと自分の将来のことと向き合っていた。

結論から言うと、まだ見つかっていない。

色々と案は考え、自分なりに答えを見つけようとした。

だが、考えているうちに自分が本当にやりたいことが何なのかがよく分からなくなってしまった。

「……そういえば、あの猫は？」

俺は自虐的な考え方を振り払うように首を振り、話題を変える。

「猫神様ならあそこだ」

寛太が指を向けた先には、道行く人から餌を貰っている光景があった。

あれが本当に神様なのか……大丈夫なのかこの街は。

と、そんなことを考えていると餌をもらい終えた猫はこちらにやってきた。

「やはり祭りはいいものじゃな！　こんなに美味しいものが溢れかえっておる」

「太るぞ」

「ふくよかなことは平和の象徴じゃ」

猫はその我儘な体を見せつけるように俺に言う。

「して、お前様は……どうやら結果はあまり良いものではないようじゃな」

俺の顔をまじまじと見た猫は呟いた。

「じゃが、約束は約束じゃ。どんなことでもあそこで喋ってもらうからな」

猫がさっきまで俺が睨んでいた舞台に目を向ける。

既に壇上に誰かが上っている。

「まあ、まだ時間はあるからな。他の人の叫びでも聞いて考えてみろよ」

一步踏み出した寛太の後を俺はついていく。

壇上の周りには多くの観衆が立っており、熱気は他とは比べ物にならない。

「やっぱ、毎年ここは凄いな」

寛太は感心するように声を漏らす。

マイクを通じて放たれる想いの叫びに対し、観衆は発表者に声援を浴びせる。

様々な声が交差し、この場を最大限に盛り上げていた。

「さあ！　続いて叫びたい方はいますか！」

司会者が声を張り上げ、次の発表者を募る。

周りからは「お前行ってこい」だの「行ってくるか」だの、この騒がしい雰囲気 に 充てられた人の声が入る。

「では、そちらの方！ 壇上にお上がりください！」

そして、手を上げていた一人の男性が壇上に上がった。

彼はふらつく足取りでマイクを手取る。どうやら酔っぱらっているらしい。

「俺あ、嫁と娘を連れていつかあ、日本一周でもしてやるかなあ！」

気持ちよさそうに声を荒げる男性はマイクを高く掲げる。

その叫びに呼応するように、

「いいねえ！ 幸せにしてやれよ！」

「もっとでっかく世界一周ってのはどうだ！」

観客が大いに盛り上がる。

いつもの祭りの光景だ。子供の頃から変わってない。

それから先も老若男女問わず、壇上で思い思いのことを叫んだ。

「――将来は宇宙飛行士になる！」

「――無理かもしれないが、告白してみようと思う！」

「――起業して、この町を豊かにして見せる！」

「――上京して一躍有名なモデルになってやる！」

彼らの瞳は輝いていた。

絶対にやってやる、成功してやる。そんな思いが声から、言葉から、仕草から伝わってくる。

「今年は例年以上に活気があるようじゃな」

「そうですね。皆威勢がよくって気持ちがいいです」

寛太と猫が発表者に向かって感心の声を上げる。

その隣で、俺は心に靄がかかり始めていた。

どうしようもなく暗い、最悪の靄が。

「……でもよ、あんなもん本気でできんのか？」

気付かぬうちに俺はその言葉が口から漏れ出ていた。

始まった。始まってしまった。俺のいつもの発作が。

「今はいいかもしれねえけど、いつかは夢から覚めるもんだろ」

「おい、今はそんな時間じゃないだろ！」

寛太が強めに俺のことを止めに入ろうとするが、今回は止まらなかった。

「いや、ああいうのは後から後悔するもんなんだよ」

俺は自然と周りに負けないように声を張り上げようとしていた。
いつものことだ。いずれ止まる。

――止まれ。

「後悔したらあんな夢見られなくなるんだからよ」

――止まれ。

「大口叩くのにも程があんぜ」

――止まれ。止まれ。

「いずれ現実を見ることになるんだ！」

――止まれ。止まれ……頼むから、誰か止めてくれ。

「だから夢なんて下らねえこと見ずにだな――ッ！！」

気が付いたら、俺は倒れ顔が地面についていた。

直後、頬に流れる鈍い痛みを感じる。

俺は、殴られたようだった。

「和樹、いい加減にしろよ」

俺が見上げると、寛太が怒りの形相をこちらに向けていた。

「いつまでうだうだ言ってんだよ！」

俺の胸倉を掴んだ寛太は青筋を立てている。

「自分に夢がないからか！ だから人に当たって少しでも楽になろうとしてんのか！ もうこっちはうんざりなんだよ！ 何度も何度も何度も何度も！ 自分の夢を馬鹿にされる身にもなったことがあるか！」

寛太の剣幕と大声が多くの人を釘付けにする。

しかし、寛太にはそんな視線は関係なかった。

「お前はいつだってそうだ！ 自分のことを自分で決められない！ 何か言ったら常に否定から入る！ それで、自分の機嫌が悪くなれば八つ当たりだ。楽しいだろうな！ そうやって自分は頑張らずに人を馬鹿にして、威張り散らかすのはさぞかし気持ちがいい生き方だろうな！」

胸倉を掴む寛太の手にさらに力が加わる。

「いい加減気づけよ。今のお前には、夢を持つ資格すらないんだよ」

ざわざわと周りに人が集まってくる。

すると、寛太は投げ捨てるように手を離し、人ごみの中に紛れて行った。

「……」

俺はただ、寛太のその背中を見つめることしかできなかった。

5

俺は祭りの喧騒から遠く離れたベンチに腰を掛けた。

「……返す言葉もねえよ」

お前の言う通りだよ、寛太。俺は正真正銘の屑野郎だ。

俺だって、頭では人を馬鹿にして自分の矜持を守ろうとすることがどれだけ虚しいことか分かっているつもりだ。

でも、俺の弱い心が、自分を守るために勝手に動いてしまう。

どうしようもないんだ。俺の心と体は昔から、ちぐはぐなんだ。

「資格がない。全く持ってその通りだ」

そんなこと、俺が一番よく分かっている。

「どうしたらいいんだよ……俺は」

答えは常に探してきたつもりだ。でも、いまだにその答えは見つからない。

その時だ。

「そんなもの、お前様以外に誰が分かるというんじゃ」

猫が俺の横に座った。

「派手にやられたな」

「当然の報いだ。俺は、それだけのことをしてきたんだからな」

何度も人の夢を嗤った。何度も人の夢を馬鹿にした。

一発殴られるだけじゃ足りないぐらいの罪が、俺にはある。

「お前様は、どうしてそこまでして夢に執着する？」

「置いて行かれるのが、怖いからだ」

「本当に、それだけか？」

猫は俺の目を見て言う。

その猫の瞳に映る自分を見ていると、心がざわめきだした。

心に蓋をしていた部分が抉られ、俺の本心が顔を出し始める。

俺の、本当の想いは――。

「俺は……『誰か』になりたかった」

俺は寛太にも明かしたことの無い心の内を語り始めた。

「夢を持ってる奴はいつも『誰か』になってる気がするんだ。ちゃんとした、『誰か』っ

という存在に。でも、俺は違う。夢のない俺は、その『誰か』にもなれていない感じだ。
ただ、漠然と生きているだけで、存在意義すらもあやふやで」

まとまらない言葉をぽつりぽつりと紡いでいく。

「それが怖かったんだ。置いて行かれる疎外感も怖かった。けどそれ以上に、自分が本当に生きている価値があるのかどうかが分からなくなるのが、凄く怖かったんだ。だから、俺は人の夢を馬鹿にした」

馬鹿にすることで、相手は『誰か』ではないと自分に言い聞かせたかった。

相手が、俺と同じく存在意義をまだ持っていないと思ったかった。

「正真正銘の屑野郎だ。俺はそんな自分が嫌いだ。だから、夢を見つけて俺自身が『誰か』になりたかった。そうしたら、もうそんなことしなくて済むから」

動機の根底にあるものは全て自分への嫌悪感だけだ。

寛太の言う通り、俺は焦っていた。

自分への嫌悪感を払拭するため、俺は一刻も早く夢を見つけなければならなかった。

「これが、俺が夢を求める本当の理由だ。馬鹿だよな。夢を馬鹿にしながら、夢を求めるなんて」

矛盾した考えに、俺は反吐が出そうだった。

遠くの方では祭りの明かりが見える。しかし、そこから流れてくるはずの喧騒は届かない。まるで、ここだけ隔離されているかのように。

「これが俺の本心だ。笑ってくれ」

俺は自嘲しながら吐き捨てる。

それからしばらくして、ようやく猫が重く閉ざしていた口を開き、

「なあ、一つ良いか？」

「なんだ？」

「夢がそんな簡単に見つかるわけないだろ」

そう言ったのだった。

「ある者は運命的な出会いをし、ある者は何かに感激を受け、ある者は天才的な直感で思いつく。そうやって、人は幾重の偶然という奇跡を得て、自分の夢を語るんだ。たかが一週間で決められたものが夢なんてありえない」

「お前が一週間で考えろって言ったんだろ」

「確かに言った。しかし、最初からお前様が決められるとは思っておらんよ」

衝撃の告白に、俺はわずかに憤りを感じる。

「じゃあ、なんだ！ 今日までの時間は全て無意味だったってことかよ！ 俺の考えた時間は全部、全部！」

「無意味なわけあるか」

怒る俺のことを猫は優しい表情を浮かべて見つめてくる。

すると、俺の怒りが静まっていくようだった。

「この一週間ほど自分と向き合ったことはあるか？ 自分は何がやりたいのか、何ができて、何が好きなのか。自分のことを徹底的に調べ上げ、自分の将来について真剣に、真摯に考えたことはあったか？」

俺は猫の言葉にゆっくりと首を振った。

「そうだろ？ だったらその時間が全部無駄だなんてことはない。この一週間、お前様もがいて苦しんで、それでも必死に答えを出そうとしていたことは知っておる。その一瞬、一秒が、お前様をいずれ出会う答えへ導く手助けをしてくれる」

猫の言葉は今まで以上に、すんなりと胸に入ってくる。

それこそ、本当に神様に諭されているような気分だ。

「それに、夢がないことを嘆くな。本当に大切なことは夢を見つけることじゃない。自分の夢が何なのか、それを考え自分自身と向き合うことこそが大切なんだ」

「考える、時間……」

「そうだ。その自分と向き合った時間が、思考が、真摯さが——お前様を『何者か』にしてくれる」

猫は静かにそう言うと、笑った気がした。

とても暖かい。優しい暖かさを感じる。

その優しさのおかげか、俺は今まで隠してきた弱い心を、口から吐き出した。

「——ずっと、他人任せにしてきたんだぜ？」

「別にいいだろ、人に手を借りても。もちろん、今のままじゃ駄目だけどな。ちゃんと、最後には自分一人で決められるようになれ」

「——色んな人を傷つけたんだよ」

「だったら謝れ。そんで、今後はその癖をきっぱりやめればいい」

「——こんな俺でも、夢を見て、いいのかな？」

「当たり前だ。自分と向き合ったものに、夢を持つ資格はある」

目頭が熱くなる。

ふと、何か頬を伝う感覚がある。きっと、熱が零れ落ちたんだろう。

それを見た猫は、俺の手を思いっきり叩く。

「さあ！ 行ってこい！ 今のお前の気持ちを叫んで来い！」

「……ああ！」

俺は熱を乱暴に拭い、そして会場に走り出した。

前を向け。今こそ、自分と向き合う時だ。

会場に着くと、丁度壇上の上で寛太が叫んでいた。

「俺は神社にもっとたくさんの人が来てもらえるように努力して、色んな人を幸せにしたい！」

力のこもった声に観客も負けじと声を張る。

そして、発表が終わると司会者が「では、この辺で」と幕引きをしようとした。

「待ってくれ！」

俺はその終止符を強引に遮った。

視線は俺に集中する。その中で、呼吸を整えながら俺は壇上に登った。

すると、司会者は「では、これで最後の発表者です」と言い、観衆も急な割込みに大いに盛り上がる。

「夢は見つかったのか？」

壇上に上がると、寛太がマイクを投げってくる。

「見つかんねえよ。だから、これが初めての負け戦だな」

「そうか。だったら精一杯、情けない負け宣言を見せてくれよ」

短く笑った俺達はお互いに手を合わし交代する。

これから話すことは俺の惨めで、みっともない自分勝手な話だ。

知り合いが聞いて笑うかもしれない。罵声が飛んでくるかもしれない。

でも、全部受け入れる覚悟はある。

それが今の俺だから。

俺はマイクを持って大きく息を吸った。

話す内容など考えていない。今はただ、自分と正々堂々と向き合うだけだ。

そして、

「――俺には、夢がありません」

俺の止まっていた時間を動かしたのだった。

6

「俺には、小さい頃から夢がありませんでした。

周りの友達がたくさん夢を言う中、俺は彼らの夢を「どうせ叶わない」と馬鹿にしていました。

そんな自分が嫌いで、何とかして自分も皆と同じように夢を探しました。

気が付けば俺は大学生になってました。

俺は大学生になったらきっと見つかると思ってました。

ドラマとか映画とかで描かれる大学生は現実ではないと分かっているながらも、なんとなく大学生になったらやりたいことが見つかり、そう勝手に思っていました。

でも、現実はそんなに甘くはなかった。

どんどん周りから離されていくだけだった。

そして最近、本気で自分の将来と向き合わないといけなくなりました。

だけど、全然見つからなくて。

俺は焦ってました。皆は夢や目標を持って走っているのに、俺だけは何もない。

皆『誰か』になろうとしているのに、俺はその『誰か』にもなれないのが怖かった。

馬鹿馬鹿しいと思うかもしれませんが、俺は自分の存在意義が欲しかった。

夢を持ち、夢に向かうことで、自分が生きてる理由が欲しかった。

でもそんなもんがすぐに見つかるわけもなく、俺は人の夢を馬鹿にして、皆は自分と同じでちゃんとした夢がまだないと思い込んだ。

俺は、そんな俺がすごく嫌で、一刻も早く夢を見つけたいといけなかった。

……でも、ある奴が俺に教えてくれました。

夢がないことを悪く思うなど。自分と向き合った時間が大切なんだと。

もちろん、夢を馬鹿にしてしまった人には謝ります。

また、誰かの手を借りるかもしれません。

ですが、俺はこうやって悩んで、悩み抜いたこの時間を大切にします。

そして、これから先、もっと悩むことになると思います。

でも、その悩んだ先に、夢があると思うんです。

だから、俺の今の夢は――」

体の震えが収まらない。

こんなもの夢とは言わないのかもしれない。

でも、今の俺が精一杯考えて出した唯一の答えだ。

笑われたっていい。馬鹿にされたっていい。

これが、今の俺の夢なんだ。

「――夢を見つけること。これが今の俺の夢です」

俺の一世一代の、みっともない告白が幕を閉じる。

持っていたマイクを下げ、観衆を見渡す。

すると、

――パチパチパチ。

まばらながらも、ゆったりと拍手が鳴り出す。

さっきまでの声援はない。でも、そこには確かに優しい音が溢れていた。

俺は唇を噛み締め、流れそうになる涙をこらえながら最後に一礼をした。

「ありがとう、ございました」

「よかったのか？」

和樹の発表が終わると同時刻、観衆の後ろの方で寛太と猫が喋っていた。

「お前だったら、自分のやりたいようにあいつを誘導できただろ？」

「何を言っているんじゃない。わしはそんな洗脳じみたことはできないと言ったじゃろ」

「いや、和樹相手ならできるだろ」

寛太は下を向いて猫神のことを見つめる。

「お前は猫神じゃない。お前は——和樹だろ」

猫神は何も言わず、ただ壇上にいる和樹を見つめていた。

「どこかで見たことがあると思ったんだ。お前の特徴的な模様。まさか、昔書いた小説の中にいるとは思わなかったけどな」

「……それだけでは何とも」

「だから俺は一つ手を打った。トマトジュースだ。あの小説にいた猫はトマトジュースを飲んでたからな」

「よく覚えてんな」

「結構読み込んだんだよ」

寛太がそう言うと、猫は短く笑う。

「自分自身を誘導することは余裕だろ？　なんでしなかった」

「……俺は、俺自身に何か特別なことをしてほしいわけじゃない。ただ、自信を持って生きてほしいだけなんだ」

猫はそう言うと、踵を返す。

「いいのか、最後に自分自身に挨拶しないで」

「いいよ。あいつはようやく、自分と向き合うことができるようになったんだ。これから必要なのは俺じゃない」

「そうか」

猫は近くの茂みに入っていく。

そして、最後に寛太にこう伝えた。

「俺を、よろしくな」

「ああ。和樹を助けてくれてありがとう」

そのやり取りを最後に、猫は完全に姿を消したのだった。

太鼓の音と共に祭りが終わりを迎える。

俺は、少しでも前に進むことができただろうか。

多分、進んではいないだろうな。ずっと足踏みしたままだ。

でも、これからだ。これから先、俺は前に進むために努力しないとイケない。

「今日は、満月か」

あの日のように月は雲に隠れていない。

しっかりとした輝きを持って、俺を照らしていた。

7

「よし……」

最後の文字を入力したと同時に、俺は大きく息を吐いた。

「こうやって書いてみると、俺って本当にどうしようもない屑野郎だな」

あの頃を思い返しながら、自分のしてきたことに苦笑いをする。

あれから数年経ったが、未だ夢という夢はまだない。

でも、これから先、未来の俺が夢を見つけるかもしれない。

それが五年後か十年後かは分からない。

でも、どれだけ時間をかけようとも探していればきっと見つかるはずだ。

そして、心の底からしたいことが見つかった時、足枷にならないように今日を精一杯生きよう。

今日を、今を精一杯生きて、そして明日の自分に繋げよう。

そうやって、明日の自分が何者かになれるように、今日を一所懸命に生きよう。

「こんなもんか」

俺は小説の確認作業をしていると、一本の電話がかかってきた。会社からだ。

「藤島です……え？ 今度のプロジェクトに俺が？ はい、ありがとうございます！」

電話を切った俺は一人でガッツポーズをする。

「よっしゃ！」

ずっと目標にしてきたプロジェクトに参加でき、俺は嬉しくて思わず声が出る。

「今日は明日に備えて早く寝るか……っと、その前に」

俺は、書き上げた小説に最後の仕上げを施す。

「『誰か』……いや、ここはあいつの言葉を借りて」

そして、ページの一番初めに俺は題名を付け加えた。

「題名は――」

2021年10月14日